

「読み比べ」の可能性

一 教材をめぐる閉塞

「国語科教材を問い直す」という特集テーマに対し、実際に教科書編集に関与する立場から、いささか事例報告めいたことがらを申し述べてみたい。

稿者は、東京書籍株式会社高等学校国語科用教科書の編集に参加している。初めて教科書編集に関わったのは、『精選国語Ⅰ』（2東書国Ⅰ5559 平成九年二月二十八日文部省検定済）であった。この教科書は、比較的若手の編著者を集めて作られたが、営業的には厳しい結果が出た。その問題点がいろいろ指摘された中で、古文編については、導入単元の教材選択が致命的であったとの批判を受けたのである。

『精選国語Ⅰ』古文編の導入単元には「説話」を置いた。これは多くの教科書と同様である。古文編の単元は、

- 一 説話（古今著聞集・宇治拾遺物語・袋草紙）
- 二 随筆と軍記（徒然草・平家物語）

兼 築 信 行

三 物語と日記（竹取物語・伊勢物語・更級日記）

四 和歌（万葉集・古今和歌集・新古今和歌集）

五 近世の文学（奥の細道・北越雪譜）

という構成で、このかぎりではさほど特異な印象は受けないだろう。しかし、この比較的若手の編著者たちは、いくらかなりとも新機軸、ないしは新味を盛り込みたいという意欲を抱く。さまざまに吟味したが、全くの新教材を導入できるとしたら、比較的豊富かつ多様な素材の中から選択できる説話であると判断した。その結果、冒頭には『古今著聞集』から「江次郎、実賢の餅をとりて食らふこと」を教材化した。続いては「宇治拾遺物語」から「小野篁の学才」を置いたが、これはいくつかの教科書で既に取り上げられた作品である。そして第三席には、歌学書『袋草紙』雑談から「能因と節信」を新たに教材化した。三教材の本文を掲げる。

〔江次郎、実賢の餅をとりて食らふこと〕

醍醐の大僧止実賢、餅を焼きて食ひけるに、きはめたる眠りの人にて、餅を持ちながら、ふたふたと眠りけるに、前に江次郎という恪勤者のありけるが、僧正の眠りてうなづくを、我にこの餅食へと気色あるぞと心得て、走りよりて、手に持ちたる餅を取りて食ひてけり。

僧正おどろきてのち、「ここに持ちたりつる餅は。」と尋ねられければ、江次郎、「その餅は、はや食へと候ひつれば、食べ候ひぬ。」とこたへけり。僧正、「比興のことなり。」とて、諸人に語りて笑ひけるとぞ。

〔小野篁の学才〕

今は昔、小野篁といふ人おはしけり。嵯峨の帝の御時に、内裏に札を立てたりけるに、「無悪善」と書きたりけり。帝、篁に、「読め。」と仰せられたりければ、「読みは読み候ひなん。されど、恐れにて候へば、え申し候はじ。」と奏しければ、「ただ申せ。」と、たびたび仰せられければ、「さかなくてよからん」と申して候ふぞ。されば、君をのろひまゐらせて候ふなり。」と申しければ、「これは、おのれ放ちては、たれか書かん。」と仰せられければ、「さればこそ、申し候はじとは申して候ひつれ。」と申すに、帝、「さて、何も、書きたらんものは、読んでんや。」と仰せられければ、「何にても、読み候ひなん。」と申しければ、片仮名の「ね」

文字を十二書かせたまひて、「読め。」と仰せられければ、「ねこの子のこねこ、ししの子のこじし。」と読みたりければ、帝ほほ笑ませたまひて、事なくてやみにけり。

〔能因と節信〕

加久夜の長の帯刀節信は数寄者なり。はじめて能因に会ひて、かたみに感緒あり。能因いはく、「今日見参の引出物に、見すべきもの侍り。」とて、懐中より、錦の小袋を取り出だす。その中に、鉋屑一筋あり。示していはく、「これは吾が重宝なり。長柄の橋造りし時の鉋屑なり。」と云々。

時に、節信喜甚だしくて、また懐中より、紙に包めるものを取り出だす。これを開きて見るに、涸れたるかへるなり。「これは、井堤の蛙に侍り。」と云々。ともに感嘆して、おのおのこれを懐にし、退散すと云々。今の世の人をこと称すべきや。

古の歌仙は、みな好けるなり。しかれば、能因は人に、「好きたまへ。好きぬれば、秀歌は詠む。」とぞ申しける。

東京書籍は国語Ⅰ・Ⅱの教科書を三系列（分冊・精選・新編）発行するが、「精選国語Ⅰ」は、大学受験をも意識しつつも、幅広い学習需要にも応じるという、汎用性を狙った位置付けである。それは、教科書としてのコンセプトを明確にしにくいということでもある。

導入単元の教材選択として致命的であった点とは、まず、いず

れも敬語が用いられているところが批判された。第一単元から難し過ぎるといっているのである。しかし、それ以上に問題だったのは、三教材のうち二つまで新教材を置いたことであつた。年度始めの最も多忙な次期に、現場は悠長に教材研究を行っている余裕はない。すなわち編者たちが説話を、比較的豊富に素材を有するジャンルであり、新しい教材を開拓できると考えたことが、完全に裏目に出たといえよう。現場の現実を無視した理想論は、採択結果によつて厳しく評価される。結局はなるほど、各教科書の導入単元には、安定教材とも定番教材とも称される、いわゆる「一定評ある教材」、扱ひなれた作品がラインナップされることとなる。教科内容の精選と重点化が叫ばれ、特に古典教材については、新しい教材の開拓はもはや構想しにくい状況がたち現われていることは確かだろう。

二 国語総合C領域「読み比べ」

新しい学習指導要領に基づき、平成十五年度から高等学校に新設科目として国語総合が導入されることとなつた。当該科目は国語Iを継承・改善した基礎的かつ総合的科目である。国語科の新たな必修科目は、国語表現I（二単位）および国語総合（四単位）のうち、いずれかを選択履修することとなつたが、前者は小単位数科目の設置方針を受けて新設されたもので、必修選択の主流は後者となるものと考えられる。稿者は東京書籍の国語総合教科書三種の編集に関わることとなつた。

今回の改定で、国語総合のC領域（読むこと）の「内容の取扱

い」における言語活動例として、「考えを広げるため、様々な古典や現代の文章を読み比べる」ことが標榜された。編集委員会ではこれを重視し、「読み比べ」をどのように教科書の中に織り込むか、単元として明瞭に構成するかに腐心し、長時間にわたる議論を行った。その結果、『新編国語総合Ⅰ』（2東書国総001平成十四年二月十日検定済）と『精選国語総合Ⅰ』（2東書国総002）の二種において、古文編の中に「読み比べ」の単元を設置した。「読み比べ」という発想は、今までの「読み込み」型のアプローチとは切り口を変えて、新たな学習活動を展開する可能性が見出されるように感じられたのである。

『新編国語総合』古文編の単元構成は次の通りである。

- 一 説話に親しむ（宇治拾遺物語・古今著聞集）
 - 二 随筆を読む（徒然草・方丈記）
 - 三 詩歌を味わう（大岡信「折々のうた」）
 - 四 物語を読み比べる（伊勢物語・更級日記）
- 『精選総合国語』古文編の単元構成は次の通りである。
- 一 説話（宇治拾遺物語・古今著聞集・今昔物語集）
 - 二 随筆（徒然草）
 - 三 軍記（平家物語）
 - 四 歌物語（伊勢物語）
 - 五 詩歌（万葉集・古今和歌集・新古今和歌集・奥の細道）
 - 六 平安文学にみる愛（物語を読み比べる（堤中納言物語・土佐日記・俊頼髄脳）

『新編総合国語』の第四単元、『精選総合国語』の第六単元が、

それぞれ「読み比べ」に相当する単元をなしている。いずれも古文編の最末尾、すなわち総まとめ的な位置を占め、物語の要素を基本にしたものとなった。具体的な内容を以下に紹介したい。

三 『新編国語総合』

『新編国語総合』では、『伊勢物語』の「芥川」と、『更級日記』に記述される「竹芝寺」の物語をもつて、比較の俎上に載せた。いずれもいわゆる定評ある教材だが、男女が逃避行を試みるというストーリーの共通性の周辺には、いつぼうでさまざまな対照的な要素を読み取ることができる。男と女とどちらが主導権を握っているか、またハッピーエンドとアンハッピーエンドという全く対照的な結末も分かりやすく、類似点と相違点をかなり明瞭に整理することができ、その上で、さまざまなレベルの学習活動を展開していくことが可能であろう。「芥川」には『伊勢物語絵巻』による各場面を配し、ヴィジュアル的にも工夫した。いずれも周知の教材だが、本文を掲げる。

〔芥川〕

昔、男ありけり。女のえ得まじかりけるを、年を経てよばひわたりけるを、からうじて盗み出でて、いと暗きに来けり。芥川といふ川を率て行きければ、草の上に置きたりける露を、「かれは何ぞ。」となむ男に問ひける。行くさき多く、夜もふけにければ、鬼ある所とも知らで、神さへいといみじう鳴り、雨もいたう降りければ、あばらなる蔵に、

女をば奥に押し入れて、男、弓、胡籥を負ひて戸口にをり。はや夜も明けなむと思ひつつあたりけるに、鬼はや一口に食ひてけり。神鳴る騒ぎにえ聞かざりけり。やうやう夜も明けゆくに、見れば率て来し女もなし。足ずりをして泣けどもかひなし。

白玉か何ぞと人の問ひしとき露と答へて消えなましもの

〔竹芝寺〕

これは、いにしへ竹芝といふさかなり。国の人のありけるを、火焚屋の火焚く衛士にさし奉りたりけるに、御前の庭を掃くとて、「などや苦しきめを見るらむ。わが国に七つ三つ造り据ゑたる酒壺に、さし渡したる直柄のひさこの南風吹けば北になびき、北風吹けば南になびき、西風吹けば東になびき、東風吹けば西になびくを見て、かくてあるよ。」と独りごち、つぶやきけるを、その時、帝の御むすめいみじうかしづかれ給ふ、ただひとり御簾の際に立ち出で給ひて、柱よりかかりて御覧するに、このをのこかく独りごつを、いとあはれに、いかなるひさこの、いかなるびくならむと、いみじうゆかしくおほされければ、御簾を押し上げて、「あのをのこ、こち寄れ」と召しければ、かしまりて高欄のつらに参りたりければ、「言ひつること、いま一かへり我に言ひて聞かせよ。」と仰せられければ、酒壺のことを、いま一かへり申しければ、「我率て行きて見せよ。

と言ふやうあり。」と仰せられければ、かしこくおそろしと思ひけれど、さるべきにやありけむ、負ひ奉りて下るに、論なく人追ひて来らむと思ひて、その夜、勢多の橋のもとに、この宮を据ゑ奉りて、勢多の橋を一間ばかりこぼちて、それを飛び越えて、この宮をかき負ひ奉りて、七日七夜といふに、武蔵の国に行き着きにけり。

帝、后、皇女失せ給ひぬとおぼしまどひ、求め給ふに、「武蔵の国の衛士のをのこなむ、いと香ばしき物を首にひきかけて飛ぶやうに逃げける。」と申し出でて、このをのこを尋ぬるになかりけり。論なくもとの国にこそ行くらめとおほやけより使下りて追ふに、勢多の橋こぼれて、え行きやらず。三月といふに武蔵の国に行き着きて、このをのこを尋ぬるに、この皇女おほやけ使を召して、「我さるべきにやありけむ、このをのこの家ゆかしくて、率て行けと言ひしかば率て来たり。いみじくこありよくおほゆ。このをのこ罪し掠ぜられは、我はいかであれど。これも前の世にこの国に跡を垂るべき宿世こそありけめ。はや帰りておほやけにこのよしを奏せよ」と仰せられければ、言はむ方なく、上りて、帝に、かくなむありつると奏しければ、「言ふかひなし。そのをのこを罪しても、今はこの宮を取り返し、都に返し奉るべきにもあらず。竹芝のをのこに、生けらむ世のかぎり、武蔵の国を預けとらせて、おほやけ事もなさせじ。ただ、宮にその国を預け奉らせ給ふ。」よしの宣旨下りにければ、この家を内裏のごとく造りて住ませ奉り

ける家を、宮など失せ給ひにければ、寺になしたるを、竹芝寺といふなり。その宮の生み給へる子どもは、やがて武蔵といふ姓を得てなむありける。それより後、火焚屋に女は居るなり。

「読み比べ」の指針として

1 二つの物語に登場する男性は、それぞれどのような身分・立場に置かれた人物であったのか。

2 二つの物語に登場する女性は、どのような点が似ており、どのような点が違っているのか。

3 二つの物語の結末はどのように違っているか。

の三つを掲げ、まともに「二つの物語を読み終えて、この対照的な結末がどのようなところから生じたと思つたか、各自の考えをまとめて発表し合おう」という課題を置いた。

四 『精選国語総合』

『精選国語総合』では、『堤中納言物語』「このついで」の挿話、『土佐日記』の「帰京」、『俊頼髓脳』の「呉招孝説話」をもって「読み比べ」単元を構成した。『新編国語総合』に比べ、『精選国語総合』では比較の観点をやや緩やかに考え、男女・親子などさまざまな愛を含む逸話をラインナップしたのである。『堤中納言物語』や『俊頼髓脳』は珍しい出典といえよう。ここに新教材を開拓する余地を見出すことができた。本文を掲げる。

〔和歌の力〕

ある公達に忍びて通ふ人やありけむ、いとうつくしき児さへいできにければ、あはれと思ひきこえながら、厳しきかたつ方やありけむ、絶え間がちにてあるほどに、思ひも忘れずいみじう慕ふがうつくしう、時々はある所に渡しなごするをも、「今。」なども言はでありしを、ほど経て立ち寄りたりしかば、いとさびしげにて、めづらしくや思ひけむ、かき撫でつつ見ぬたりしを、え立ち止まらぬことありて出づるを、ならひにければ、例のいたう慕ふが、あはれにおぼえて、しばし立ち止まりて、「さらば、いざよ。」とて、かき抱きて出でけるを、いと苦しげに見送りて、前なる火取りを手まさぐりにして、

こだにかくあくがれ出では薫物のひとりやいとと思ひこがれむ

と忍びやかに言ふを、屏風の後ろにて聞きて、いみじうあはれにおぼえければ、児も返して、そのままになむららしと。

〔亡き児を思ふ〕

紀貫之は、五年にわたる土佐守の任期を終えて、京の自宅にたどり着いた。次の文章は、その時の様子を描写したものである。

夜更けて来れば、所々も見えず。京に入り立ちてうれし。

家に至りて、門に入るに、月明かければ、いとよくありさま見ゆ。聞きしよりもまして、言ふかひなくぞこぼれ破れたる。

家に預けたりつる人の心も、荒れたるなりけり。中垣こそあれ、ひとつ家のやうなれば、望みて預かれるなり。さるは、たよりごとに、ものも絶えず得させたり。今宵、「かかること。」と、声高にもも言はせず。いとほつらく見ゆれど、こころざしはせむとす。

さて、池めいてくほまり、水つける所あり。ほとりに松もありき。五年六年のうちに、千年や過ぎにけむ、かたへはなくなりけり。今生ひたるぞ交じれる。おほかたのみな荒れにたれば、「あはれ。」とぞ人々言ふ。思ひ出でぬことなく、思ひ恋しきがうちに、この家にて生まれし女兒のもろともに帰らねば、いかがは悲しき。船人もみな、子たかりてののしる。かかるうちに、なほ悲しきに堪へずして、ひそかに心知れる人と言へりける歌、

生まれしも帰らぬものをわが宿に子松のあるを見るが
悲しさ

とぞ言へる。なほ飽かずやあらむ、またかくなむ、

見し人の松の千年に見ましかば速く悲しき別れせまし
や

忘れ難く、口惜しきこと多かれど、え尽くさす。

〔柿の葉に書いた詩〕

中国から伝わった説話である。ある日、呉招孝は、宮中から流れ出る川のほとりで、漢詩を書きつけた柿の紅葉を見つけた。女の筆跡であった。その人に心ひかれて、招孝は川の上流から和（応答の詩）を流した。数年後、宮中で暮らしていた妃たちが親元へ返され、招孝をそのうちの一人の婿にという縁談がもちあがる。

招孝、かの柿の葉に詩を書きつけたる人のみ恋しくて、いかにも異事せむともおほえざりけれど、親のすることなれば、心にもあらず婿にはなりてけり。この女の、思ふさまにて、あはれに心苦しかりければ、かの明け暮れ恋ひ悲しみつる人も、やうやう思ひ忘れて経るほどに、女の言ひけるは、「われがもの思ひ人の姿にて見えしは、いかなることぞや。願はくは我に隠すことなかれ。」招孝答へていはく、「我、昔、宮の外にして遊びき。水の上に木の葉のあるを見れば、女の手にて一つの詩を書けり。それを見て後、その手の主にあひ逢はむの思ひありて、今日いまに忘るることなし。しかはあれど、君に親しくなりて後、ことのほかに思ひ慰めることあり。」と言へり。女これを聞きて、「その詩はいかがありし。また、その詩の和や作りたりし。」と言ひければ、「しかありき。」と言ひければ、女、このことを聞くに、涙先に立ちて、契りおろかならぬことを知りぬ。「その詩は自らせしなり。和の詩、また我がもとにあり。」

と言ひて、おのおの取り出でたるを見れば、互ひに我が手にてあるに見ゆるに、おほろけの契りにはあらずと知りぬ。「そもそも、いかにしてか我が詩をば得し。」「この身いたづらに月日を送ることを嘆きて、川のほとりに遊びき。岩のはざまに流れ止まりたる木の葉を見れば、一つの詩あり。もしありし我が詩を見ける人の作りけるかと思ひて、置きたりつるなり。」とぞ申しける。

単元の冒頭には次のようなキャプションを置き、単元名称とともに、これが「読み比べ」の学習活動を主題としていることを明瞭に示してある。

平安時代に書き記された物語・日記・歌学書の中から、さまざまな愛情を描いた三つの話を挙げた。これらの話に表れている愛情に注目しながら読み比べてみよう。

まどめの課題は次の通りである。

- 1 三つの話に表れている愛情は、どのような種類の愛か。
- 2 三つの話において、それぞれの愛が生じたり、深められたりする契機となつたものは何か。
- 3 三つの話を読んで、現代社会の制度や価値観と相違する点、共通する点を挙げてみよう。

五 「読み比べ」の可能性

東京書籍の二種の国語総合教科書が、古文編に立てた「読み比べ」単元の内容を示した。本来「考えを広げるため、様々な古

典や現代の文章を読み比べること」はより多様な方向性を含んでいたはずであり、『高等学校学習指導要領解説 国語編』（平成十一年十二月 文部省）の当該項目は次のように述べている。

「ここでは、『考えを広げるため、様々な古典や現代の文章』を読むことを前提としている。

読み比べを行うためには、指導に工夫が必要である。例えば、読み比べる文章は、テーマや内容の上で関連のあるものを選ぶ必要がある。また、一人の生徒が複数の文章を読み比べるのか、グループで複数の文章を分担して読み、その結果を比べるのかなど、様々な学習の形態や方法が考えられる。

また、ここでは、様々な古典や現代の文章を読み比べるということであるから、時代の新古を問わず、題材、内容、もの見方や考え方などいろいろな視点から読み比べを行い、生徒の考えを広げていくことが必要である。（七〇～七二頁）

右の解説も、要するに様々なものを読めということと、そこに比較という活動を導入すべきことを示唆しているといえるだろう。ちなみに東京書籍のもう一種の国語総合教科書（『国語総合』という名称の現代文編・古文編の分冊本。2 東書国総003・004）では、池内紀「無数の伝令が走っている」と岩井克人「広告の形而上学」をもつて構成する現代文編の第六単元の評論③に「現代の評論を読み比べる」と副題を付し、「読み比べて考えを深めよう」の課題を置いたうえで、小説の読み比べをも示唆するが、課題自体かなり抽象的である。「読み比べ」の方法論はまだまだ熟成していない。現代と古典の読み比べは、当然構想されてしかる

べきはずだが、東京書籍版は実現できなかった。

前節までに紹介した二種の教科書の例では、時代的には近い教材を組み合わせているが、『新編国語総合』はよく知られた教材のみを組み合わせ、『精選国語総合』では新しい教材を取り込むことで、二つの異なった方向性を示したことになる。ここで重要なのは、「読み比べ」がいつばうで新教材を開拓する契機をもたらしつつ、いつばうで従来の「読み込み」型とは異なる柔軟な学習活動を展開する発想を提起している点である。

例えば『精選国語総合』の「和歌の力」は、同教科書の第四単元「歌物語」に収録される『伊勢物語』「筒井筒」と読み比べることも可能となってくる。女が詠んだ一首の歌によって、それを隠れ聞いた男が、女に対する愛情を取り戻すという歌徳説話のプロット部分は、両話全く同一である。複数のテキストから共通点、相違点を抽出する意識をもつことにより、「読み比べ」は、教科書の中に置かれた教材を縦横にリンクさせる機制ともなってくるだろう。学習活動のバランスも考慮する必要があるが、限られた教材を活用し、多様な学習活動を発想するうえで、「読み比べ」には大きな可能性がある。積極的に評価し、事例研究を重ねること、閉塞した教材の状況を「問い直す」一つの方向を示唆するものではないだろうか。

（早稲田大学）